

象形文字ルウィ語碑文の字体の比較考察

大 城 光 正

1. はじめに

現在までに、ヒッタイト象形文字碑文は大小合わせると約300碑文にも及んでいる。同碑文が記述されている碑石は主に小アジアの東部・南東部、および北シリアの地域より発見され、国王の名のもとに作成された、いわゆる国王碑文の類であるが、僅少とはいえ、経済文書、書簡文書の類も発見されている¹⁾。これらの碑文の編集(碑文翻字、碑文翻訳、碑文注釈)は、1967年と1975年に出版されたP. Meriggi、および2000年に出版されたD. J. Hawkinsの網羅的な碑文集があるが、特にHawkinsによる編集は同碑文研究の重要な文献として高い評価を得ている²⁾。そこで、本稿ではHawkinsによって編集された碑文集を基本的な資料として、同碑文の地域的な分布を確認し、その後、同分類にしたがって各碑文の象形文字の字体使用の地域的、歴史的な様相を比較考察してみたいと思う。

2. 象形文字ルウィ語碑文の分布

象形文字ルウィ語碑文は作成時代順に、(1)ヒッタイト王国時代に作成されたもの、(2)ヒッタイト王国滅亡からルウィ系の新ヒッタイト文化成立以前の間中期のもの(紀元前1200年頃～紀元前1000年頃)、(3)アナトリア南東部・シリア北方を中心に栄えた新ヒッタイト文化の担い手であるルウィ系民族による石碑文のもの(紀元前1000年頃～紀元前8世紀後半)の3つの時期に分けられる³⁾。本稿における考察対象の碑文分析は、上記の(3)に類別される時期に作成された石碑文が主な資料であり、同碑文言語は印欧アナトリア諸語(I. E. -Anatolian)のルウィ語群の中の象形文字ルウィ語(Hieroglyphic Luwian)に類別されるものである。

同碑文の数はHawkins(2000)の網羅的な碑文のリストから約270碑文である。そして、これらの碑文をHawkins(2000)の地域分類を参考にして以下のように(1)から(10)の地域に分類した⁴⁾：

(1) CILICIA : KARATEPE I

(2) KARKAMIŠ : KARKAMIŠ A1a, A1b, A2+3, A4a, A4b, A5a, A5b, A6, A7, A11a, A11b+c,

- A12, A13d, A14b, A15a, A15b, A23, A24a, A31; CEKKE; KÖRKÜN, TÜNP 1;
ASSUR letter a, b, c, d, e, f+g⁵⁾
- (3) TELL AHMAR : ALEPPO 2; BOROWSKI 3; TELL AHMAR 1, TELL AHMAR 2, TELL AHMAR 4, TELL AHMAR 5
- (4) MARAŞ : ISKENDERUN; MARAŞ 1, MARAŞ 2, MARAŞ 3, MARAŞ 4, MARAŞ 8, MARAŞ 14
- (5) MALATYA : DARENDE; GÜRÜN; ISPEKÇÜR; IZGIN; PALANGA; ŞIRZI
- (6) COMMAGENE : ADIYAMAN 1; ANCOZ 1, ANCOZ 7-10; BOYBEYPINARI; MALPINAR
- (7) AMUQ : JISR EL HADID (frs. 1-3); KIRÇOĞLU; TELL TAYINAT 1, TELL TAYINAT 2; TULEIL1;
TULEIL 2
- (8) ALEPPO : BABYLON 1, BABYLON 2, BABYLON 3
- (9) HAMA : HAMA 1-3, HAMA 4, HAMA 6-7; HINES; MEHARDE+SHEIZAR
- (10) TABAL : AKSARAY; ANDAVAL; BOHÇA; BOR; BULGARMADEN; ÇİFTLİK; EĞREK; HISARCİK 1;
IVRIZ 1; KARABURUN; KAYSERI; KULULU 1, KULULU 2, KULULU 3, KULULU 4,
KULULU 5; KULULU lead strips; PORSUK; SULTANHAN; SUVASA; TOPADA

3. 象形文字の使用字体における碑文・地域別分布

象形文字ルウィ語碑文における象形文字の字体には「記念碑体 (monumental)」と「草書体 (cursive)」の2種類の字体が認められる⁶⁾。一般に、KARKAMIŞの石碑文に代表される記念碑体は浮彫り字体で刻まれているが、尖筆で刻まれた記念碑体も数的には多くはないが存在する。この尖筆で刻まれた記念碑体の碑文では、下記のように、さらに崩した草書体の字体への変遷的な字体も散見される場合がある。草書体は ASSUR 書簡文書などにみられる尖筆で彫られた刻字の崩し字体であるが、尖筆による記念碑体で記された碑文と同様に、草書体の字形表記の中にも、判別可能な象形字体を有する記念碑体も含まれており、両字体の混用が認められる。以下に、碑文作成に使用された象形文字の字体別の碑文分類を例示する。

記念碑字体 (M)、草書字体 (C) として類別し、例外的な字体が散見される場合はその主要な象形文字の字体をカッコ内 (○, ○, ○) に明記する。一般に、記念碑体は KARKAMIŞ に代表される浮彫り文字 (凸) であるが、尖筆 (↑) によって刻まれた記念碑体の場合は (M+↑)、逆に、浮彫り字体による草書体の碑文の場合は (C+凸) と明記する。それ故、文字明記されていない碑文はほぼ完璧などどちらかの字体で刻まれた碑文と解釈することが可能である。

(1) CILICIA

(M+↑) : KARATEPE I (ta, tã, sã, na, ma の記念碑体/草書体混用)

(2) KARKAMIŞ

(M) : KARKAMIŠ A1a, A1b, A2+3, A6 (ta, ma の草書体), A7 (ta, ma の草書体), A11a, A11b+c, A12, A13d, A14b, A15a, A15b (u の草書体), A23, A24a, A31.

(M+↑) : CEKKE (ma, mu, á, na, sà, tà の草書体)

(C) : KARKAMIŠ A4a, A5a (ara/i, mu の記念碑体), A5b (ta の記念碑体); KÖRKÜN (ta, sà の記念碑体); TÜNP 1 (ta の記念碑体); ASSUR letter (a, b, c, d, e, f+g)

(3) TELL AHMAR

(M) : ALEPPO 2 ; BOROWSKI 3 (ma の草書体); TELL AHMAR 1 (ma の草書体), TELL AHMAR 2 (ma の草書体), TELL AHMAR 4, TELL AHMAR 5

(4) MARAŞ

(M) : MARAŞ 1, MARAŞ 4 (ma, ara/i の草書体)

(C+凸) : ISKENDERUN; MARAŞ 2, MARAŞ 3, MARAŞ 8, MARAŞ 14

(5) MALATYA

(M) : GÜRÜN; IZGIN (mu, u, á の草書体)

(C) : DARENDE; ISPEKÇÜR; PALANGA (ta の記念碑体); ŞIRZI

(6) COMMAGENE

(C+凸) : ADIYAMAN 1 (ma の記念碑体); ANCOZ 1, ANCOZ 7-10; BOYBEYPINARI (ta, tà の記念碑体); MALPINAR

(7) AMUQ

(M) : JISR EL HADID (frags. 1-3); TELL TAYINAT 1, TELL TAYINAT 2; TULEIL 1

(C) : KIRÇOĞLU (tà の記念碑体); TULEIL 2

(8) ALEPPO

(M+↑) : BABYLON 1 (á, ara/i の草書体)

(C) : BABYLON 2, BABYLON 3

(9) HAMA

(M) : HAMA 8; MEHARDE+SHEIZAR

(C+凸) : HAMA 1-3, HAMA 4 (ma, sà, ta の記念碑体), HAMA 6-7; RESTAN (ma の記念碑体)

(10) TABAL

(M) : KAYSERI (á, tà の草書体) ; SUVASA

(C) : ANDAVAL ; BOHÇA ; BOR ; BULGARMADEN ; ÇİFTLIK (ta, tà の記念碑体) ; EĞREK ; HISARCIK
1 ; İVRİZ 2 ; KARABURUN ; KULULU 1, KULULU 2 (ta, sa の記念碑体), KULULU 3, KULULU
4 (ara/i の記念碑体), KULULU 5 ; KULULU (lead strips) ; PORSUK (mu, ta, á の記念
碑体) ; SULTANHAN ; TOPADA

(C+凸) : AKSARAY
















そこで、各碑文における字体について、以下のことが指摘できると思われる。



まず、“浮彫り”文字と、尖筆による刻字の碑文との関係を考えてみたい。石碑に“浮彫り”文字で刻まれた字体は記念碑体が大半(分類符号(M))であり、国王碑文という碑石の性質上、格式ある装飾的な文字様式が好まれたことが推察される。KARKAMIŞ の大半の碑文、TELL AHMAR、MARAS、COMMAGENE、HAMA 地域の碑文はほぼ“浮彫り”文字による碑文(分類符号(M), (C+凸))である。逆に、草書体による碑文は浮彫り文字の使用ではなく、線状に刻まれた刻字(分類符号(C))が多くを占めている。つまり、記念碑体=浮彫り文字、草書体=尖筆による刻字という傾向が指摘される。それ故、尖筆による刻字の記念碑体(M+↑)の碑文資料は数的には少数と言える(M+↑ > KARATEPE ; CEKKE ; BABYLON)が、その逆の浮彫り文字による草書体(C+凸)は国王碑文という資料の性質上の根拠から、MARAS、ISKENDERUN、BOYBEYPINARI、MALPINAR、ANCOZ、ADIYAMAN、HAMA、RESTAN、AKSARAY 等に確認される。特に、尖筆による草書体の碑文(分類符号(C))で多くが占められている地域はTABAL、CILICIA と ALEPPO の地域ということになり、これらの地域は南東アナトリアの象形文字碑文の地域ではそれぞれ東西の周辺地域に位置している。

次に、記念碑体の碑文中に草書体の字体が混在する場合と、草書体の碑文中に記念碑体の字体が混在する場合の両字体の混用を検討してみたい。

まず、記念碑体の碑文中に草書体の字体が混在する場合は、以下に挙げた碑文の草書体の混用例からほぼ明白な傾向が指摘可能である：









KARATEPE I (ta, tà, sa, na, ma の草書体混用) ; KARKAMIŞ A6 (ta, ma の草書体使用)、KARKAMIŞ A7 (ta, ma の草書体使用)、KARKAMIŞ A15b (u の草書体使用)、CEKKE (ma, mu, á, na, sa, tà の草書体使用)、BOROWSKI 3 (ma の草書体使用)、TELL AHMAR 1 (ma の草書体使用)、TELL AHMAR 2 (ma の草書体使用)、MARAS 4 (ma, ara/i の草書体使用)、IZGIN (mu, u, á の草書体使用)、BABYLON 1 (á, ara/i の草書体使用)、KAYSERI (á, tà の草書体使用)。






つまり、草書体の象形文字 á (), ara/i (), u (), ma (), mu (), na (), sa (), ta (), ta () でほぼ占められている。これらの文字は、á「顔」(), ara/i「鳥」(), u「牡牛」(), ma「羊の頭」(), mu「牡牛+“4の指事文字の合字”」(), na「前腕」(), sa「ガゼル」(), ta

「ロバ」(), tā「手」()の象形字体であり、記念碑体の複雑な字体を造字するよりもより経済的な理由によってその草書体を使用したものと推察される。

次に、草書体の碑文中に記念碑体の字体が混在する場合も、以下に挙げた碑文の記念碑体の混用例からはほぼ明白な傾向が指摘可能である：

KARATEPE 1 (ta, tā, sà, na, ma の記念碑体混用)、KARKAMIŠ A5a (ara/i, mu の記念碑体使用)、KARKAMIŠ A5b (ta の記念碑体使用)、KÖRKÜN (ta, sà の記念碑体使用)、TÜNP 1 (ta の記念碑体使用)、PALANGA (ta の記念碑体使用)、ADİYAMAN 1 (ma の記念碑体使用)、BOYBEYPINARI (ta, tā の記念碑体使用)、KIRÇOĞLU (ta の記念碑体使用)、HAMA 4 (ma, sà, ta の記念碑体使用)、RESTAN (ma の記念碑体使用)、ÇİFTLİK (ta, tā の記念碑体使用)、KULULU 2 (ta, sà の記念碑体使用)、KULULU 4 (ara/i の記念碑体使用)、PORSUK (mu, ta, á の記念碑体使用)。

以上のことから、á (), ara/i (), ma (), mu (), na (), sà (), ta (), tā ()の各文字で占められていることが理解できる。これらの文字は上記で指摘したように記念碑体中に散見される草書体の字形とほぼ同一の文字であること (á, ara/i, u, ma, mu, na, sà, ta, tā) が確認される。つまり、草書体碑文中に見られる記念碑体の字形は、表記の時間的な経済効率による簡略的な草書体の使用例とは逆に、簡略的な草書体碑文に、より象形的で装飾的効果の高い記念碑体を挿入しているということである。

そこで、これらの両碑文パターンから看取されることは、これらの動物や身体の一部の象形的な字形は、記念碑体碑文に於いても草書体碑文に於いても書記の能書 (calligraphy) 上の懸案であったと同時に書記の書字能力の具現化でもあったと推察される。その中でも、上述のように、KARATEPE 碑文における ta (), tā (), sà (), na (), ma () の記念碑体/草書体の混用は興味深いものと言える⁷⁾。

4. 碑文の成立年代別の分析

最後に、上記の両字体の混用を碑文の成立年代別に考えてみたい⁸⁾。

象形文字ルウィ語碑文の正確な成立年代は不明であるが、碑文内に表記されている国王名、関係国名等によって、本稿末尾に添付されている碑文の発見地・作成年代が推定されている。そこで、両字体の混用が認知された碑文別の成立年代を例示してみたい。

(1) 前 11-10C: DARENDE, GÜRÜN, ISPEKÇÜR, IZGIN

(2) 前 10C: KARKAMIAŠ A1a, A1b, A14b, MARAŞ

(3) 前 10-9C: BABYLON, KARKAMIŠ A2+3, A11a, A11b+c, A12, A13d, A23, TELL AHMAR

(4) 前 9C: HAMA, ISKENDERUN, RESTAN

(5) 前 9-8C: ADİYAMAN, ANCOZ, BOYBEYPINARI, JISR EL HADID, KARKAMIŠ A6, A7, A15b,

A24a, KÖRKÜN, MALPINAR, SHEIZAR+MEHARDE, TELL TAYINAT, TULEIL, TÜNP
(6) 前 8C: AKSARAY, ANDAVAL, ASSUR letter, BOHÇA, BOR, BULGARMADEN, CEKKE, ÇIFTLIK,
EĞREK, HISARCIK, IVRIZ, KARABURUN, KARATEPE, KARKAMIŞ A4a, A31, KAYSERI,
KULULU, PALANGA, PORSUK, ŞIRZI, SULTANHAN, SUVASA, TOPADA

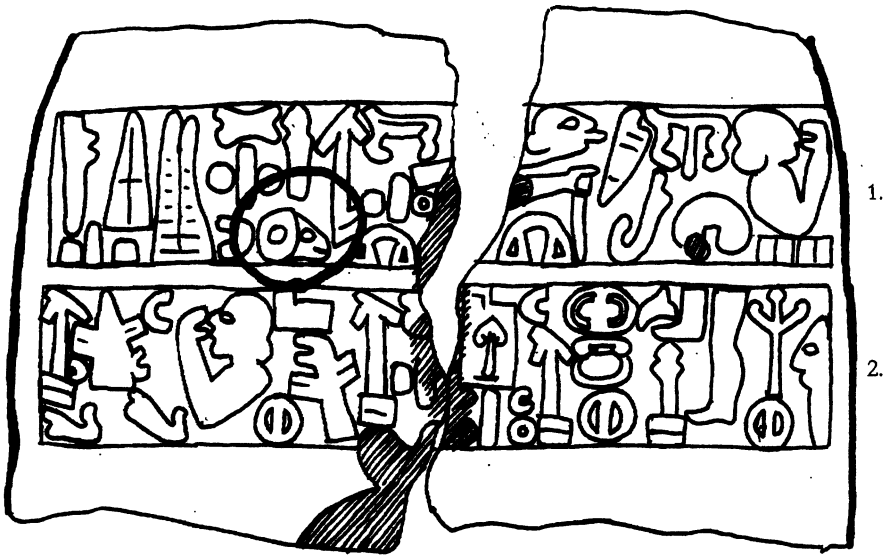
以上の区分から、文字の混用傾向は碑文の成立年代が後代になるほど多くなる傾向が指摘できる。

注

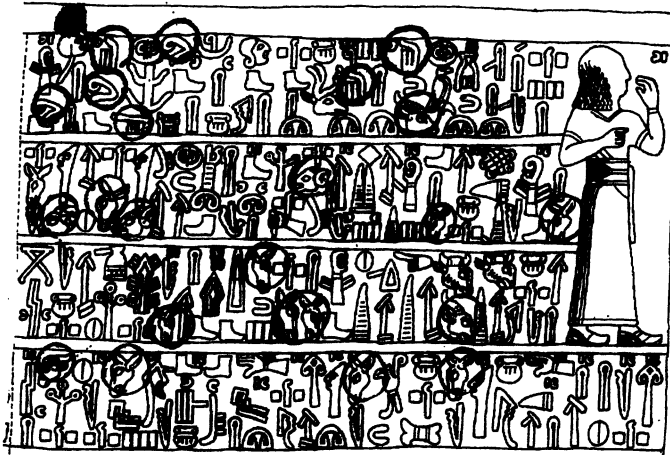
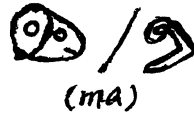
- 1) 経済文書は KULULU、書簡文書は ASSUR に代表されるものである。これらの文書は石碑文ではなく、薄い鉛板に尖筆で記されているが、数的には僅少であるので、本稿では多数を占める“石碑文”という呼称を使用する。
- 2) Meriggi (1967-75) ; Hawkins (2000) 参照。
- 3) 正確にはルウィ系都市国家群がアッシリア王 Sargon 2 世によって滅ぼされた紀元前 717 年まで。
- 4) Hawkins (2000:19-22) 参照。なお、引用される碑文名は比較考察上の混乱がないように Hawkins の欧文名称を使用する。また、言語分析では語彙抽出は可能でも文脈を把握することが不可能な断片的な碑文は考察対象としない。
- 5) ASSUR 書簡文書は 1905 年の ASSUR の発掘で、古アッシリア楔形文字粘土板書とともに アヌ・アダッド神殿の聖塔近くの家屋の床下部分から発見されたもので、鉛製の細片（縦 4cm 弱、横 10～24cm 程度）がロール状で六片、ただし、その中の 1 片は 2 片巻き状態で発見されたので、計 7 片の資料である。この書簡は商人間の取引書簡で、紀元前 8 世紀頃に KARKAMIŞ で作成され、アッシリアの KARKAMIŞ 陥落にともなって当地より戦利品として ASSUR（アッシリア王国の首都）に持ち込まれたものと推察されている。それ故、地域別資料としては、発見場所の ASSUR ではなく、KARKAMIŞ にグループ分けする。
- 6) 文字の記念碑体の字体と草書体の字体の表記は Laroche (1960) を参照。
- 7) 特に、Çambel (1999:90-91) と Hawkins (2000:67-68) を参照のこと。
- 8) 本稿では、Hawkins (2000) による碑文の成立年代に「不明」と明記されている碑文は分類に加えない。

参考文献

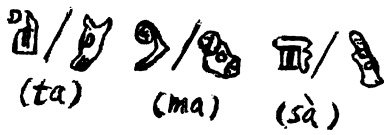
- Çambel, H. (1999) *Corpus of Hieroglyphic Luwian Inscriptions, Vol. II. Karatepe-Aslantaş*, Berlin.
- Hawkins, J. D. (2000) *Corpus of Hieroglyphic Luwian Inscriptions, Vol. I*. Berlin.
- Laroche, E. (1960) *Les hiéroglyphes Hittites I*, Paris.
- Melchert, H. C. (2003) *The Luwians*, Leiden.
- Meriggi, P. (1962) *Hieroglyphisch-Hethitisches Glossar*, Wiesbaden.
-----, (1967) *Manuale di Eteo Geroglifico, Parte II/1*, Roma.
-----, (1975) *Manuale di Eteo Geroglifico, Parte II/2-3*, Roma.
- 大城光正 (2011) 「象形文字ルウィ語の地域的変異—字体と誤謬を中心にして—」
『象形文字ルウィ語碑文の言語変異の比較研究』(基盤研究C:平成20~22年度科学研究費補助金研究成果報告書), 21-35.
- Payne, A. (2004) *Hieroglyphic Luwian*, Wiesbaden.
- Plöchl, R. (2003) *Einführung ins Hieroglyphen-Luwische*, Dresden.



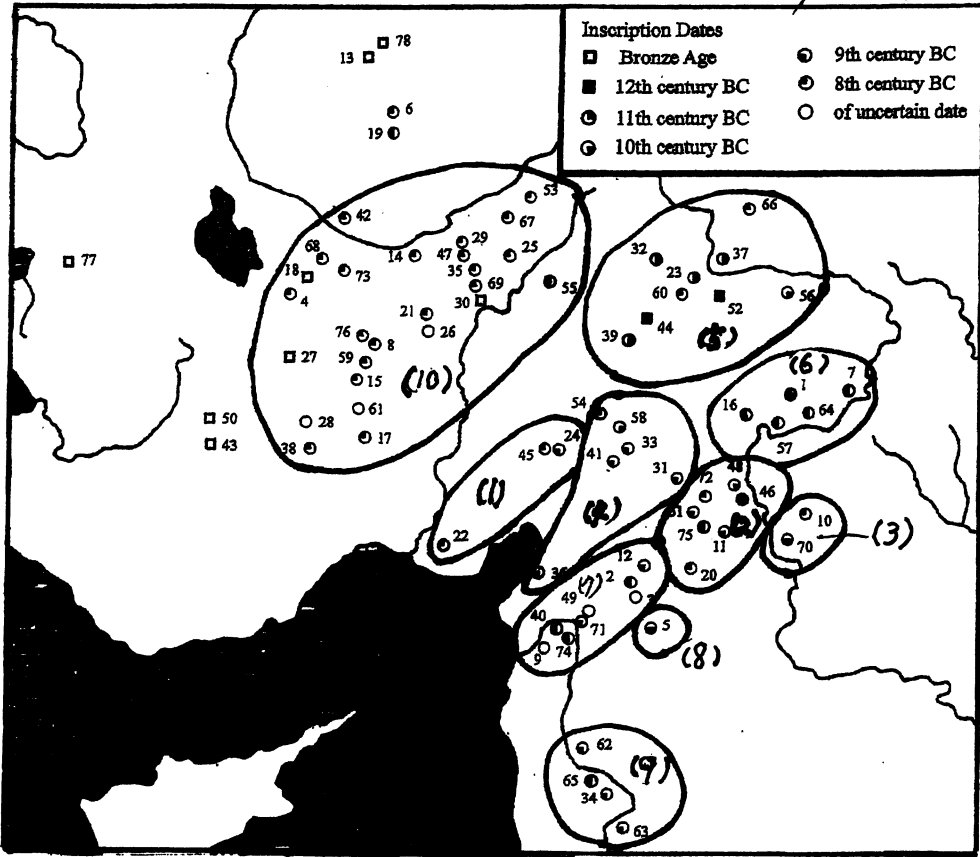
RESTAN



KARKAMIŠ A6.



Locations of Hieroglyphic Inscriptions : 10 の地域別分布
(Payne, 2004)



- | | | | |
|------------------|-------------------|----------------|---------------------|
| 1. Adıyaman | 21. Çiftlik | 41. Karaburçlu | 61. Porsuk |
| 2. Afrin | 22. Çineköy | 42. Karaburun | 62. Qal'at el Mudiq |
| 3. Ain Dara | 23. Darende | 43. Karadağ | 63. Restan |
| 4. Aksaray | 24. Domuztepe | 44. Karahöyük | 64. Samsat |
| 5. Aleppo | 25. Eğrek | 45. Karatepe | 65. Sheizar-Meharde |
| 6. Alishar | 26. Eğriköy | 46. Karkamiš | 66. Şirzi |
| 7. Ancoz | 27. Emirgazi | 47. Kayseri | 67. Sultanhan |
| 8. Andaval | 28. Breğli | 48. Kelekli | 68. Suvasa |
| 9. Antakya | 29. Erkilet | 49. Kırçoğın | 69. Tekirderbent |
| 10. Arslantaş | 30. Fraktin | 50. Kızıldağ | 70. Tell Ahmar |
| 11. Asmacık | 31. Gaziantep | 51. Körkün | 71. Tell Tayinat |
| 12. 'Azaz | 32. Gürtün | 52. Köttikale | 72. Tilscvet |
| 13. Boğazköy | 33. Hacibebekli | 53. Kululu | 73. Topada |
| 14. Boğça | 34. Hama | 54. Kürtül | 74. Tuleil |
| 15. Bor | 35. Hisarcık | 55. Kurubel | 75. Tümp |
| 16. Boybeypınarı | 36. İskenderun | 56. Malatya | 76. Veliisa |
| 17. Bulgarmaden | 37. İspekçtir | 57. Malpınar | 77. Yalbur |
| 18. Burunkaya | 38. İvriz | 58. Maraş | 78. Yazılıkaya |
| 19. Çalapverdi | 39. İzgın | 59. Niğde | |
| 20. Cekke | 40. Jisr el Hadid | 60. Palanga | |

(1)CILICIA (2)KARKAMIŞ (3)TELL AHMAR (4)MARAS (5)LALATYA
(6)COMMAGENE (7)AMUQ (8)ALEPPO (9)HAMA (10)TABAL